The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	尾崎翠「歩行」論 : おもかげを吹く風、耳の底に聴いた淋しさ
Author(s)	石原, 深予
Citation	阪大近代文学研究. 2013, 11, p. 52-65
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68323
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

尾崎翠「歩行」論
―おもかげを吹く風、耳の底に聴いた淋しさ―

石原 深予

はじめに

尾崎翠が一九三一年九月に発表した短編小説「歩行」(1)は、作品の冒頭と末尾にほぼ同じ詩が配されていることを理由に、「円環構造」の作品であるとした上で論じられる傾向がある(2)。これには尾崎の『『第七官界彷徨』の構図その他』（『新興芸術研究』第二輯 一九三一・六）における次の記述も影響していると思われる。「この作（引用者注：「第七官界彷徨」）は全篇の約七分の四をすでに雑誌「文学党員」に発表したものですが、全篇を通して「新興芸術研究」に発表して頂くに際して、（略）劈頭の二行を削除しました。（略）私の配列地図は円形を描いてぐるつと一廻りするプランだつたのです。それが、最初の二行を削除し最後の場面を省いたために、結果として私の配列地図は直線に延びてしまひました。この直線を私に行はせた原因は第一に時間不足、第二にこの作の最後を理におとさないため。（引用者注：改行）しかし私はやはり、もともと円形を描いて制作された私の配列地図に多くの未練を抱いています。今後適当な時間を得てこの物語りをふたたび円形に戻す加筆を行ふかもしれません。」

尾崎は一九三一年六月に「第七官界彷徨」全編を発表し、好評を博したが、「理におとさないため」「円形を描いてぐるつと一廻りするプラン」に沿って執筆することを中止した。それならば、尾崎の「もともと円形を描いて制作された私の配列地図に多くの未練を抱いています。」という心情から構想された作品が「歩行」であるとしても、冒頭と末尾にほぼ同じ詩が配されているという、一見して分かりやすい構成を根拠として「歩行」を「円環構造」とすることには、再考の余地があると思われる。

そこで本稿ではまず「円環構造」とされてきた「歩行」の作品構造を検討して、この作品が円環構造ではなく直線構造として読めることを提示する。そのうえで作品解釈を進めたい。解釈を進めるにあたっては、語り手「私」が心を捕えら

れている幸田当八の「おもかげ」を「暫くのあひだ」であっても忘れることの意味、「私」の淋しさと聴覚との関係、「私」が土田九作から教えられた詩についてという三点を中心とする。「歩行」と登場人物を共有する尾崎翠作品「第七官界彷徨」「こほろぎ嬢」「地下室アントンの一夜」では、喪失感や、何らかの対象に心をとらわれること、聴覚に関わることがら、そして詩が重要なモチーフとして描かれている。「歩行」の読解にあたっても、これらのモチーフは重要であると考えるからである。

一　冒頭と末尾に配されている詩と、回想する「私」

「歩行」の冒頭には、次の詩が配されている。

おもかげをわすれかねつつ
こころかなしきときは
ひとりあゆみて
おもひを野に捨てよ

おもかげをわすれかねつつ
こころくるしきときは
風とともにあゆみて
おもかげを風にあたへよ

（よみ人知らず）

そして作品末尾には、溜息を吐いた語り手「私」を気遣う土田九作が「帳面の紙を一枚破りとり」教えてくれたという詩が配されている。

おもかげをわすれかねつゝ
こゝろかなしきときは
ひとりあゆみて
おもひを野に捨てよ

おもかげをわすれかねつゝ
こゝろくるしきときは
風とゝもにあゆみて
おもかげを風にあたへよ

冒頭に配されている詩と、末尾で九作が「私」に教えた詩とは、同じ詩ではあるが表記が異なっている。冒頭の詩には作者名として「（よみ人知らず）」と付記されており、「こころ」「つつ」が踊り字を用いずに書かれている。それに対して末尾の詩には「（よみ人知らず）」という作者名は付記されていない。そして「こゝろ」「つゝ」と踊り字を用いて書かれている。これらの違いは何を意味するのだろうか。

まず、末尾の詩は土田九作が「帳面の紙を一枚破りとり」私に教えてくれたというものである。踊り字は活版印刷でも普通に用いられるが、踊り字を用いて書かれているところに、いかにもその場で書いたという味わいが現れているように見

える。「私」はこの詩について「(九作) 氏が何時か何処かゝら聞いたのだと言つてゐた。」と回想して語っている。作品の冒頭の詩の直後には「夕方、私が屋根部屋を出てひとり歩いてゐたのは、まつたく幸田当八氏のおもかげを忘れるためであつた。」とあり、そのあとに「今日の夕方に、私の祖母は急にお萩を作ることを思ひついた。」ともある。これらから「私」は「今日」の夜、すでにこの詩を知ったあと、回想しつつこの物語を語っていることが分かる。その語りは冒頭に配されている詩が九作の教えてくれたものであることを明らかにするところで終わる(3)。

つづいて冒頭の詩に「(よみ人知らず)」と付記されていることについて考えたい。「よみ人知らず」とは、古典和歌の撰集などで作者が不明の場合、あるいは事情があって作者名を伏せておく場合に記載する語である。この物語を末尾まで読み進めると、この詩は九作が「私」に教えた詩であって、九作の自作ではなく、九作が「何時か何処かゝら聞いた」詩であったことが判明し、「(よみ人知らず)」という作者名とは齟齬がないことがわかる。冒頭の詩の直後には「まつたく」幸田当八の面影を忘れるために歩いていたと、詩の内容を受けて語られていることから、「私」はこの物語を語るためにこの詩を冒頭に配したのであろうこと、それは「私」が九作からこの詩を教えてもらって、自分の気持ちと合っている詩だと思ったからであろうことが推測される。語り手「私」によって、この詩は作者名を「(よみ人知らず)」とされた上で冒頭にプロローグとして配され、最後にその詩の由来が明らかにされるのだと考えると、この作品を末尾から冒頭へ戻る円環構造として解釈する必要はなく、直線構造として解釈することが可能ではないだろうか。

また、この詩には「おもかげ」という語が用いられているが、古典和歌で「おもかげ」という語が詠みこまれている歌を確認すると、笠郎女「夕来ればもの思まさる見し人の言問ふ姿面影にして」(『萬葉集』巻第四・六〇二)がある(4)。夕方という時間帯は「歩行」において、「私」の回想のなかで「私」が外を歩行している時間帯と同じであり、「物思」は「私」の様子と同様である。他にも『伊勢物語』第二十一段は尾崎が確実に読んでいた作品であるが(5)、この段には「人はいさ思ひやすらむ玉かづら面影にのみいとゞ見えつゝ」と、「おもかげ」という語が詠みこまれた歌が記載されている。この段ではこの歌に続いて「今はとて忘るゝ草のたねをだに人の心にまかせずもがな」「忘れ草植うとだに聞くものならば思ひけりとは知りもしなまし」「忘るらむと思ふ心のうたがひにありしよりけにものぞ悲しき」と、「歩行」にも現れる「忘」れるという語を詠みこんだ歌が収録されている。これらの古典和歌や『伊勢物語』、あるいは他に「おもかげ」という語が用いられた古典和歌や物語を、「歩行」の冒頭・末尾の詩の典拠として想定することも可能であろ

う(6)。しかしこれらが確実な典拠ではなくても、冒頭の詩から「おもかげ」という言葉の用いられた古典和歌や歌物語などが読者に想起され、「(よみ人知らず)」と作者名が付記されていることと合わせて、この詩からは古風な雰囲気が醸し出されよう。それによって、知らない詩ではあるがひょっとしたら作者がはっきり分かっている作品かもしれないと、読者の関心を惹く効果があるのではないだろうか。

二 「私」の歩行と「おもかげを忘れる」こと

(一)「私」の歩行の目的が変化することについて

「歩行」は、幸田当八のおもかげを思って屋根部屋でふさいでいた語り手「私」が、祖母の命令を契機に外へ出て「ひとり歩いてゐた」ということから語り始められる。「私」はこのときの歩行の目的を「幸田当八氏のおもかげを忘れるため」と語るが、「私」が歩行するのはそもそも、お萩を松木夫人の許へ届けるようにという祖母の命令があったからである(7)。ただしこのとき、「私」は自分がお萩の入った重箱を持っていることを「忘れどほし」であり、このときの「私」にとって歩行の目的は、ただ「幸田当八氏のおもかげを忘れる」ことであった。「私」は「幸田当八氏のおもかげを忘れる」ことができない歩行を「目的に副はない歩行」と語るが、祖母のおつかいを果たしていないという点においても同じく「目的に副はない」歩行である。

そもそも祖母が「私」におつかいを命じたのは、「私」を心配していたからであり、たくさん歩き、お萩のように甘いものを食べることで「ふさぎの虫(神経の疲れ)」が癒えることを願ったからであった。そして祖母は知らないけれども、「私」自身は、自分が「ふさぎの虫に憑かれてゐる」「屋根部屋で一つの物思ひに囚はれてゐる」原因が「幸田氏の行つてしまつたのちの空漠とした一つの心理」のためであり、「私」の「神経の疲れ」が癒えるには、「幸田当八氏のおもかげを忘れる」ことが必要であると知っている。

さて「私」は、最初は祖母の命令、次に松木夫妻の依頼、そして最後に土田九作からの依頼でおつかいに出かけ、歩行する。ただし必ずしもつねに、依頼者の願いがかなったり、「私」が「幸田当八氏のおもかげを忘れ」ることができていたわけではない。

まず、松木家へ行くまでの「歩行」の表面的な目的は、お萩を持っていくことである。この時「私」はお萩を松木家に届けることができたが、松木家の夕食はすでに済んでいて、お萩はあまり役に立たなかった。「歩行」に関する祖母の願いである、運動不足の解消については果たされたが、お萩を食べることについては、「私」がお萩を食べた様子がなく果たされていない。また「幸田当八氏のおもかげを忘れる」という目的は果たされなかった。

次に、松木家から土田九作の住居までの「歩行」について

である。この時の「歩行」の目的は、松木夫妻の依頼によって土田九作にお萩とおたまじゃくしを届けること、また届けがてら「私」が「歩行」によって運動不足を解消することである。これらの目的は果たされた。しかし、「私」は「幸田当八氏のおもかげを忘れる」ことはできなかった。

お萩については、九作へお萩が届けられるのは、祖母の予想を超えた出来事である。松木夫人は九作が「もし勉強疲れをしてゐるやうだったらお萩をどっさり喰べさしてくれ」と「私」にお萩を託す。そして松木夫人の望み通り九作はお萩をたくさん食べたが、食べ過ぎて胃散を服用する。松木夫妻は九作が薬を飲むことを止めさせたいと思っているが、お萩がかえって薬の服用を誘発してしまい、夫妻の願いはかなわない。ただしここで九作が薬を服用し、薬を飲み終わってしまったことは、九作が「私」に外へ薬を買いに行くよう頼み、「私」が歩行するきっかけとなる。またここでも「私」はお萩を食べた気配がない。

おたまじゃくしについては、松木氏の思惑は「眼の前に実物を見て書いたら、土田九作でもすこしは気の利いた詩を書けるであらう。」というものであったが、その思惑は外れ、土田九作はおたまじゃくしを見て「非常に迷惑な顔」をしたり、「僕はつひにおたまじゃくしの詩作を断念した。実物のおたまじゃくしをひと目見て以来僕は決しておたまじゃくしの詩が書けなくなった。」と述べる。さらにおたまじゃくしを見ることによって、「私」は「つひに」いったん忘れていた幸田当八のことを思い出し、溜息を吐いた。「私」が幸田当八を忘れていたことについては、次節で詳しく検討したい。

「私」が幸田当八のことを思い出したのは、狭い鰻のなかで「活潑ではない運動」をしているおたまじゃくしを見たことによって、まるでそのおたまじゃくしのように、狭い屋根部屋に閉じこもって幸田当八を思って悲しい気持ちに沈み、運動不足になっていた自分を思い出したからだと考えられる。このようにおたまじゃくしを見ることによって、九作は詩を書くことを断念したり、「私」は悲しい気持ちを喚起される。二人はそれぞれ詩を書こうとしたり、幸田当八を忘れようとしていていたが、それらがおたまじゃくしによって邪魔される。ただし「私」がおたまじゃくしを見て溜息を吐いたことは、土田九作から「私」への気遣いや詩をひきだすきっかけともなった。

最後に、土田九作の依頼で、九作の住居から薬局へ買い物のために二往復するという「歩行」であるが、ここで「歩行」の目的は全く変化する。これまでの「歩行」は、ある場所から別の場所へ物を届けたり、また運動不足を解消するためであったが、九作の依頼は二度とも薬を買って戻って来ることである。「私」はまずミグレニン、次に胃散を買いに行き、戻って来るが、これらは先述したように、松木夫妻の願いである、九作が薬を止すことに反していた。しかし「私」

は二度目の買い物の道中で、一時的にではあっても「幸田当八氏のおもかげを忘れる」ことができた。次にこのことについて詳しく考察したい。

（二）おもかげを忘れること

「私」が幸田当八のことを忘れることができたのは、「私」の心の中で何らかの変化が起こったからだと考えられる。これについて検討するために、次の二つの本文を確認したい。（傍線は引用者による）。

（1）こんな目的に副はない歩行をつづけてゐるくらいなら、私はやはり屋根部屋に閉じこもつて幸田氏のことを思つてゐた方がまだいいであらう。

（2）さて私は、ふたゝび薬局をさして出かけなければならなかつた。それにしても、この一夜は、私に取つて何と歩く用事の多い一夜であらう。そして土田九作氏は、何と彼の住居にぢつとしてゐたい詩人であらう。氏はいつもあの二階に籠つてゐて、胃散で食後の運動をしたり、脳病のくすりで頭の明晳を図つたりして、そして松木氏や松木夫人の歎きにあたひする諸々の詩を作つてゐるに違ひない。――私は途々こんなことを考へて、つひに暫くのあひだ幸田当八氏のことを忘れてゐた。

「私」は幸田当八のことを思って屋根部屋に閉じこもってじっとしていた。そのようにふさいでいる「私」を心配して、祖母は「たえず私にかかはりのある事柄を呟いた」。ここで「私」には、自分が「部屋に閉じこもってじっとしている」「家族に心配されている」人物であるという認識がある。そしてこれらの状態には「幸田当八のことを思い、忘れられない状態である」という意味が付随している。

その「私」の前に、土田九作という「部屋に閉じこもってじっとしている」人物が現れる。土田九作はその身内である松木夫妻の「歎きにあたひする」詩を作る人物でもある。「私」は自身について「部屋に閉じこもってじっとしている」「家族に心配されている」という認識があるために、土田九作の中に自身と同じ様子を見出し、心の中で自身と九作とを重ねていたのではないだろうか。他方、部屋に閉じこもっている九作に対して、幸田当八は「広く研究資料を集めるため、各地遍歴の旅を思ひ立つた」という、旅に出て「外を歩行している」人物である。この日の夕方以降、松木邸や九作の部屋、薬局など、「各地遍歴」と言うには大袈裟であるが、「私」もあちこち歩きまわっている。これは幸田当八の行為に重なる。

このように「私」は、「部屋に閉じこもり」「家族に心配されている」のは自身ではなく、土田九作のこととして考えている。さらに土田九作のことを考えながら、幸田当八と同様の行為をしている。その行為は「幸田当八のことを思い、忘れられない」という状態にある「部屋に閉じこもっている」

という行為とは異なっている。このような心身の状態が同時に成立したことによって、「屋根部屋に閉じこもり、じっとしていて、家族に心配されている。幸田当八のことを思い、忘れられない。」という心身の状態であった自身が一時的になくなる。そこで「私」は「暫くのあひだ幸田当八氏のことを忘れてゐた」のではないだろうか。

また、「私」は幸田当八の来訪によって、本来の自分の部屋から屋根部屋へ移動していた。「屋根部屋」でじっとしているのは本来の「私」の姿ではない。幸田当八が滞在した部屋は、元は「私」の部屋である。幸田当八は「私」の部屋から出て、また旅に出るが、「私」は自分の部屋に戻らない。「私」の心の中には幸田当八の面影が残り続けているが、「私」の元の部屋の中にも、「私」にとっては引き続き幸田当八が滞在しているかのようである。このように、自身の元の部屋に戻らず、本来の居場所ではない「屋根部屋」にいる「私」は、家で適切な居場所にいない。そうすると幸田当八が旅立ったあとの「私」にとっての適切な居場所とは、「外」であったのではないだろうか。「私」の心情はいまだ幸田当八と一緒にいた時のままであり、そこで時間が止まっているかのようである。しかし幸田当八はすでに歩を進めて「私」の家の「外」へ旅立っていった。そうであれば、「私」も家の「外」で歩くという、幸田当八と同じ場所で同様の行為をしてみることによって、「私」の心の中で止まっている時間がふたたび動きはじめる可能性があったのではないだろうか。

「私」は幸田当八に心を捕らえられているが、「歩行」という行為を実際に「外」で行うことによって、身体の動きが幸田当八を連想させる動きと同様となる。その「私」の状態は心身ともに幸田当八にとらわれているとも言えるが、心身の平衡が保たれているとも言えるだろう。「私」が「暫くのあひだ幸田当八氏のことを忘れてゐた」時とは、その平衡が破られた時である。この時はまた「私」の心身の状態に変化が起こり、「私」が幸田当八と一緒にいた時や場所にとらわれている状態から離れ、あるいは「私」の「神経の疲れ」が癒えていく可能性を示した時だったのではないだろうか。

この作品の題である「歩行」とは、作中での「私」の行為であるばかりでなく、「私」が忘れかねている幸田当八の行っている「各地遍歴の旅」を連想させる言葉でもあった。

三　「私」の淋しさと「芭蕉の幹が風に揺れる音」

（一）「私」の淋しさについて

「私」の祖母は、「私」との会話で「吐息をつき、打ちしめつた声」で「世の中は病人だらけではないか。」と憂いごとを言ったり、幸田当八を迎えるにあたって「座敷では、夜淋しい音がして、お客様が睡れぬと思ふのぢや。秋風の音は淋しい」と言い、「淋しい音」を感じとっている。また孫であ

る「私」が屋根部屋に閉じこもると、「ああ、うちの孫はこのごろまったく運動不足をしてゐて、ふさぎの虫に憑かれてゐる。」と「私」の様子を心配して、松木家へお萩を届けさせ、「私」が運動不足を解消し、甘いものを食べてふさぎの虫という神経の疲れが癒えるようにはからう。このように祖母はつねに周囲の憂いごとや心配事に心を向け、彼女が向かっている炉の「灰」の色調のように明るい心持ちではないようであるが、それらの解決策も考える。

祖母は座敷の淋しい音について、「お前さんのよい耳でよく聴いてみてくれ」と「私」に頼み、「私」は「耳の底」に「もつとも淋しい秋風の音」である「隣家の垣根にある芭蕉の幹が風に揺れる音」を聴きとる。そこで祖母と「私」とは「隣家の芭蕉からいくらか遠」い部屋に幸田当八を迎えることに決めた。「秋風」が吹き、草木が勢いを失っていく様子にもの寂しさを感じるのは一般的な感じ方であるが、このように祖母と「私」とは、「淋しい」音とはどのようなものであるかについて、同じ感覚を有している。そして「私」のほうが「よい耳」という、より鋭い感覚を有していることが分かる。

幸田当八は「私」の兄である小野一助の紹介によって「私」の家にやってきて滞在し、「私」と共に「恋の戯曲」をたくさん朗読し(8)、「次の調査地に行つてしまつた」。「私」は当八が旅立ったあとの自身について「私はたゞ、幸田氏の行つてしまつたのちの空漠とした一つの心理を知つてゐるだけである。」と語る。それならば当八の滞在中は、「私」には空漠としていない心理があったということであろう。「私」は当八が旅立ったあと「せりふの朗読に慣れた口辺が淋しく、口辺の淋しいまゝに幾つでも窓の柿を食べた。」と語る。これによると「せりふの朗読に慣れた口辺が淋し」いのであるから、当八の滞在中には「口辺」が淋しくはなく、満ち足りていたということである。そしてもう一つ、語られてはいないが満ち足りていたはずの部分は、当八の声を聴き続けた「私」の「耳」の辺りであろう。当八が旅立ったあと、聴き慣れた当八の声を聴くことのなくなった「私」の「耳」の辺りもまた、淋しい状態にあるのではないだろうか。これについては第四節で考察したい。

当八が旅立ったあと、「私」が暗い屋根部屋にひきこもり、「窓の狐格子をとざし、そして祖母の焚火の煙に咽」んでいたことにも留意したい。これらの行為は「空漠とした一つの心理」「淋しさ」による自閉的な行為と考えられるが、当八がいなくなったという「淋しさ」が、かえってそれらの行為によって強められもしたのではないだろうか。

(二)「芭蕉の幹」を吹く風　「私」を吹く風

「芭蕉」が和歌や俳諧に詠まれている例として、中世の歌人西行の「風吹けば徒に破れ行く芭蕉葉のあればと身をも頼

むべきかは」（『山家集』）がある。また松尾芭蕉の門人路通に「芭蕉葉は何になれとや秋の風」（『猿蓑』）という句がある。このように芭蕉の葉が秋風に吹かれている様子は和歌や俳諧に見られるが、管見の限りでは芭蕉の幹が秋風に吹かれている様子を詠んだ歌や句は見つからなかった。芭蕉の葉ではなく、芭蕉の幹が風に吹かれて揺れる音を「もつとも淋しい秋風の音」と聴いたところに、「歩行」の語り手「私」や、また祖母の独特の感じ方が見出せるだろう。

さて「私」は祖母の命令で松木家へおつかいに出された。この時「私」は夕飯を食べる前であり、祖母はおつかい先の松木家で「私」が「お萩をどつさりよばれて呉れればよいが」と期待していた。このため「私」はおそらく「空腹」という状態でおつかいに出されている。ここで「芭蕉の幹」について考えてみると、芭蕉は葉柄が互いに巻き合って幹となるため、中身は空っぽである。「私」は中身が空っぽである芭蕉の幹が風に揺れる音を「もつとも淋しい秋風の音」と感じ取っていた。おつかいに出されている「私」は、お腹が空の状態であり、かつ空漠という曖昧ではっきりしない心理状態で野を歩き、風に吹かれて「うらぶれた気持ちをひとしほ深め」たり、ひとしお「悲しい心理」になったりする。この時の「私」は、自身が「もつとも淋しい秋風の音」を感じ取った「芭蕉の幹」と、中身が空っぽでありながら「淋しい」「悲しい」といった明るくはない様子で風に吹かれていることにおいて、重なっているのである。

四　「私」が九作から教えられた詩

（一）おたまじゃくしの機能

「私」は幸田当八が旅立ったあと、「空漠とした一つの心理」を知り、彼を忘れられない。これは当八滞在中を回想している部分以外での、「私」の心理の基調となっていると言えよう。先述したように、この状態は「暫くのあひだ」破られて、「私」は当八のことを忘れるが、おたまじゃくしを見ているうちに「このおたまじやくしにも何か悲しいことがあるのであらう――そして私は、ふたゝび幸田当八氏のことを思ひだし、しぜんと溜息を吐いてしまつたのである。」とあるように、幸田当八のことを思い出してしまう。ここで「私」は、狭い屋根部屋に閉じこもって運動不足になっていた自分を、狭い罎のなかのおたまじゃくしに重ね合わせ、おたまじゃくしに「何か悲しいことがあるのであらう」と自分の気持ちを投影しているようである。

「私」の吐いた溜息は土田九作に共鳴し、九作も「大きい息」を一つする。そこで九作は「何か悲しいことがあるのか。」と「私」の心情に沿うことを語りかける。そして「悲しい時には、あんまり小さい動物などを瞶めると心の毒になるからお止し。悲しい時に蟻やおたまじやくしを見てゐると、人間の心が蟻の心になつたり、おたまじやくしの心境になつたりし

て、ちつとも区別が判らなくなるからね。（そして土田氏は、おたまじやくしの罎を幾重にも風呂敷に包んでしまひ階段の上り口に運んで）こんな時には、上の方をみて歌をうたふといゝだらう。大きい声でうたつてごらん」と処方を述べる。そして九作は「じつとしてゐたい人」であるという「私」の見立てにもかかわらず、「私」を気遣い、「私」の「心の毒」の原因を取り除くかのように、「おたまじやくしの罎を幾重にも風呂敷に包んでしまひ階段の上り口に運」んだ。このように九作がおたまじゃくしを隠すことからは、二つの意味が読み取れよう。まず「私」に対する気遣いという意味が読み取れる。罎を風呂敷で包むことは、悲しそうに見える「私」の心を包みこみ、保護することの、換喩的な行為と見られる(9)。また九作はおたまじゃくしを見ることで詩が書けなくなっていた。おたまじゃくしの罎を視界からなくすことは、九作にとっても自身を意気阻喪させるものを除去するという意味がある。

九作はおたまじゃくしを見たことによって詩を書くことを断念した。「おたまじやくし」は音符の比喩とも考えられるが(10)、ここで「おたまじやくし」は音をあらわすという音符のもつ機能は果たさず、音をあらわさないようにする役割を果たしている。なぜなら九作はおたまじゃくしを見たことによって詩が書けなくなった。したがって九作が書いた詩が朗読され、音声として響くことも実現しない。また「私」はおたまじゃくしを見たことによって意気消沈し、歌を歌おうとしても歌えない。第二節で述べたように、おたまじゃくしを見たことによって、九作は詩を書くことを断念したり、「私」は悲しい気持ちを喚起された。二人はそれぞれ詩を書こうとしたり、当八を忘れようとしていたが、それらがおたまじゃくしによって邪魔されたという点において同様である。おたまじゃくしは、九作と「私」のどちらにとっても、活動する力を弱らせるものとして機能している。

他方「私」がおたまじゃくしを見て溜息を吐いたことは、九作から「私」への気遣いや詩をひきだすきっかけともなった。九作が「私」に「詩」を教えたことは、「詩」を介したコミュニケーションである。尾崎翠作品では詩歌を介した「こころこまやかな」やりとりが繰りかえし描かれるが(11)、この場面もその一つとして指摘できるだろう。

（二）詩を読むこと

土田九作が「私」に教えた詩は、作者が明らかでないだけではなく、その内容も、誰が何時といった限定はなく、野や風という漠然とした風景が表現されている。

先述したように、「私」は九作の狭い二階の部屋で、狭い罎の中のあまり元気のないおたまじゃくしを見て、それに自分の心情や屋根部屋での様子を重ね、幸田当八のことを思い出し、溜息を吐いた。このような閉塞的な状況から場面は一

転して、作品の末尾に配された詩によって、限定のない広い場所が提示される。これは当八が旅立ったあとの「私」の「空漠とした一つの心理」という表現に呼応していよう。また、この詩に「おもかげをわすれかねつゝ／こゝころかなしきときは／ひとりあゆみて」「おもかげをわすれかねつゝ／こゝろくるしきときは／風とゝともにあゆみて」とあることは、「私」の心情や行為に一致している。だからこそ「私」は、そのような不自由な心の状態を解決するための処方とみられる「おもひを野に捨てよ」「おもかげを風にあたへよ」という詩句に、目をとめたのではないだろうか。

さて「私」は当八が旅立ったあと、戯曲の台詞を発声することに慣れていたのに、発声する機会がなくなり、「口辺が淋し」くなっていた。そして当八と共に読んだ戯曲を模倣し、「あゝ、フモオル様〔12〕、あなたはもう行つておしまひになりました」という台詞を、発声するのではなく、文字として「餅取粉の表面に書いた」〔13〕。口辺とともに、当八の発声による台詞を聞き慣れた「私」の「耳の辺り」もまた、当八が旅立ったあと「淋しい」状態になっていたと考えられる。九作は「帳面の紙を一枚破りとり」、「私」に詩を教えてくれるが、「私」は帳面の紙に書かれた詩を、声には出さずとも黙読したであろう。発声せずとも思いを文字で書きあらわしたり、文字を読んで音声のイメージを再現することによって、「私」の「口辺の淋しさ」「耳の辺りの淋しさ」はなぐさめられたのではないだろうか。

九作が「私」に教えた「詩」は、「おもひ」「おもかげ」という心の内側にあるものを、「野に捨てよ」「風にあたへよ」と命じている。「私」はこの詩を教えられるまで、誰かの依頼にしたがって、歩いて物を届けることを繰りかえしていた。次に「私」が、九作から教えられたこの詩を読んで、詩という言葉によって作られた別の世界の中で、歩いて、「かなしみ」という「おもひ」を「野に捨て」たり、忘れたい「おもかげ」を「風にあたへ」ることを想像するならば、その「おもひ」や「おもかげ」は一刻であっても「私」の心の中から消えて、ひととき「私」の「神経の疲れ」は癒えたのではないだろうか〔14〕。

おわりに

尾崎翠の他作品においても聴覚に関することがらは重要なモチーフとして描かれている。また「歩行」と登場人物を共有する「地下室アントンの一夜」においては、苦渋な精神状態にある登場人物が一刻の安らぎを得る様子が描かれている。他作品に描かれる聴覚に関することがらと「歩行」に描かれたそれとの関連を検討すること、また「歩行」と「地下室アントンの一夜」との関係を検討することは、今後の課題としたい。

注

（1）尾崎翠作品の引用はすべて『定本尾崎翠全集』（筑摩書房　一九九八）に拠る。ただし論者によって、第二節に引用した本文には傍線を付した箇所がある。また第四節で引用した本文中の詩の改行箇所は斜線で示した。

（2）戸塚隆子「尾崎翠の作品解釈――『第七官界彷徨』『歩行』『地下室アントンの一夜』を中心に――」（『研究年報』第三十集　日本大学文理学部　一九八二・二）「無意識世界も〈非正常心理〉も円環構造の中の一通過点にすぎなくなってしまっている。」、近藤裕子「尾崎翠「歩行」の身体性――風とお萩とおたまじゃくし」（『国文学　解釈と教材の研究』　学燈社　二〇〇三・四）「こうして物語は、溜息とともに末尾の風の歌に乗って、呼応する冒頭の歌へと還ってゆく。歌は、それを形作る音符（おたまじゃくし）のイメージが、瓶からとびだしたおたまじゃくしを暗示するものの、「私」を円環の外に解き放つことなく、瓶のような屋根部屋へと連れ帰るのである。」、武内佳代「町子のクィアな物語――連作としての尾崎翠『第七官界彷徨』『歩行』『こほろぎ嬢』」（『国文』第一一〇号　お茶の水女子大学国語国文学会　二〇〇八・十二）「冒頭に同じ詩を配すことで円環構造がとられ」、金夏娟「尾崎翠「歩行」論」（『比較日本学教育研究センター研究年報』第七号　お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター　二〇一一・三）「小説の冒頭と末尾に同じ詩が繰り返して配置されているため、物語は円環する構造になっている。」「しかし、葛藤の末、「私」は想い続けることを決め、地上の歩行を経て再び屋根部屋に戻る。」など。

（3）近藤裕子氏の前掲論文に次の指摘がある。「この物語が実は、土田氏から歌を手渡された以後の回想、すなわち語り手が既にこの歌を知った後に語った物語だったことにも、改めて気づかされるのである。」

（4）『萬葉集』の引用は『萬葉集』（短歌雑誌編輯部校訂　紅玉堂書店　一九二六）に拠る。なお、この歌の直前の六〇一番の歌は「心ゆも吾は思はざりき山川も隔たらなくにかく恋ひむとは」である。「歩行」において「私」が幸田当八から朗読させられた戯曲全集の台詞「あゝ、幾山河を行っておしまひになるのでございます」と「やまかは」という語が共通している。もちろん「幾山河」という語からは若山牧水「幾山河こえさり行かば寂しさのはてなむ国ぞけふも旅ゆく」（『海の声』　一九〇八）が想起される。

（5）拙稿「「第七官界彷徨」と翠」（『郷土出身文学者シリーズ⑦　尾崎翠』　鳥取県立図書館　二〇一一）にて指摘した。本稿での『伊勢物語』の引用は『伊勢物語』（久松潜一著　改造文庫　一九三〇）に拠る。

（6）正徹の歌で「面影」という語が詠まれる場合、一緒に詠まれる言葉が「歩行」に現れる言葉としばしば共通している。「和歌データベース」（国際日本文化研究センター　http://www.nichibun.ac.jp/graphicversion/dbase/waka.html）、『丹鶴叢

書　草根集』（国書刊行会　一九一一）を参照した。「なれし夜の面影もうし忘れ草おふてふ野へにあさき沢水」「わすれぬを思ひすててはむかへとも我がゆふくれとしたふ面影」「面影の又やはさのみ身にしまむつま吹きかへすこすの秋かせ」「みし人の俤はこふ秋風に雲もいく度身にしくるらむ」。他に想定される「おもかげ」という語を含む先行作品に訳詩集『於母影』がある。黒澤亜里子「尾崎翠と少女小説」（『定本尾崎翠全集』下巻　一九九八　筑摩書房）に、尾崎翠の『於母影』受容について次の指摘がある。「ゲーテの「ミニヨンの歌」をはじめとする『於母影』中の翻訳詩をかなり早い時期から愛読していたらしいことが窺える。」

（7）三浦恵美子「尾崎翠研究――恋と詩をめぐって」（『東京女子大学日本文学』第一〇五号　二〇〇九・三）に次の指摘がある。「「私」が戸外へ出るのは、祖母から松木夫人宅・松木氏から九作宅・九作から薬局と、いつも他者からの働きかけ（おつかいを命じられること）によるものであり、このような受動的な運動は部屋の中に閉じこもることと自発的に外に出て活動することとの中間に位置しているといえるだろう。」また近藤裕子氏の前掲論文にも「私」の歩行について「祖母流の治療的はからい」「外からもたらされた歩行」という指摘がある。

（8）「私」は戯曲のせりふを朗読するにあたって「柿を一つ喰べると私はふしぎにせりふの発音をすることができた。たぶん、おしめ籠に腰かけて柿を喰べてゐる幸田氏の態度が私の心を解きほぐしたのであらう。」と語っている。これについては、先に「私」が屋根部屋に移った時に「おしめの乾籠に腰をかけ（略）柿をたべてゐ」たことから、同じ動作をする幸田当八に対し、「私」がシンパシーを感じたのが一因ではないかと考えられる。なおこの部分については三浦恵美子氏の前掲論文に、おしめ籠に腰掛けることを「〈生殖のイメージ〉に対する封印を暗示した行動」であり、二人の「肉体による接触が封印されている」という指摘がある。また近藤裕子氏の前掲論文には戯曲の朗読をする二人について、次の指摘がある。「台詞は、それ自体が戯曲というフィクションである上に、エクリチュールという点でも二重に虚構なのだが、声に置き替えられ、柿の実と分かちがたく体内に摂り込まれることによって身体化され、感情のリアリティを醸成してゆくのだ。」

（9）北川扶生子「女の子のサバイバル――尾崎翠の文学的方法」（『尾崎翠フォーラム in 鳥取 2012　報告集』尾崎翠フォーラム実行委員会　二〇一二・十二）に「換喩の方法というのは「第七官界彷徨」に限らず、尾崎翠の作品世界で非常にしばしば登場するものではないかと思います。」という指摘がある。

（10）「おたまじやくし」を音符の比喩として用いる例は「第七官界彷徨」にもある。また古屋鏡子「日常の中の非日常・物の位置――尾崎翠『第七官界彷徨』」（『新日本文学』　第三書館　一九八二・一）に「地下室アントンの一夜」での「おたまじやくし」を音符と連想する指摘があり、近藤裕子「儚くひそやかな

るものへの親和」（『尾崎翠の新世紀――第七官界への招待――』「尾崎翠の新世紀」実行委員会 二〇〇九・三）には、「歩行」での「おたまじやくし」について「もしも「私」が歌をうたえたなら、それは鰻を飛び出し天空に流れる音符にかわるかもしれないのだ。」という指摘がある。

(11) 拙稿「「第七官界彷徨」と翠」（前掲）にて指摘した。

(12)「フモオル様」という人物の登場する戯曲に典拠があるのかどうかは筆者の調査では分からなかった。川崎賢子『尾崎翠 砂丘の彼方へ』（岩波書店 二〇一〇）には次の説明がある。「「フモオル」という男性の登場する戯曲は典拠がわからない。架空の戯曲かもしれない。固有名としてではなく一般名詞として、ドイツ語の「Humor」すなわち和製英語ではユーモアと称される「humor」の「諧謔」という意や、ラテン語にさかのぼる「体液」という意を、連想することになる。」

(13) 三浦恵美子氏の前掲論文に次の指摘がある。「「私」の恋におけるそれまでの行動は「戯曲を読む」「柿を食べる」というものであり、身体的にいうと「口」に集約されていた。しかし「私」は当八という対象を喪失した後、口辺の淋しいままに戯曲の台詞を「呟く」のではなく、手を使って「書く」という行動を起こす。それまでは当八にテクスト（戯曲全集）を渡され「読む人・演技する人」になり、その後も九作に詩を渡され「読む人・誘導される人」になるはずの「私」が、恋が成就し当八という恋人が側に居れば語り合うことが出来ることを自己の中に内面化する。つまりこれは「私」が失恋を経て、どこにも行き場のない言葉を声ではなく文字として残す、「書く人」へ接近することを意味している。」

(14) 拙稿「尾崎翠の詩と病理――「こほろぎ嬢」「地下室アントンの一夜」を中心に――」（『和漢語文研究』第五号 京都府立大学国中文学会 二〇〇七・十一）で、「地下室アントンの一夜」において、苦渋な精神状態にある詩人土田九作が「地下室アントン」で一刻の安らぎを得ることについて論じた。

【付記】本稿は、近代文学研究会（二〇〇九年十二月 於 京都光華女子大学）、京都府立大学国中文学会（二〇一一年十二月 於 京都府立大学）、近藤裕子先生のゼミナール（二〇一二年五月 於 東京女子大学）での口頭発表「尾崎翠「歩行」論」にもとづいている。発表の機会を下さいました近藤裕子先生、またそれぞれの発表に際して貴重なご教示を頂き、お世話になりました皆様に感謝いたします。

（いしはら・みよ／京都府立大学大学院博士後期課程）